

興正菩薩叡尊の像 重要文化財

死後は興正菩薩の名で呼ばれる僧の叡尊は、平安時代（794～1185 年）に荒廃していた西大寺を再興した。師に対する深い尊敬の念を表現するために、弟子たちは叡尊が 80 歳になったときに仏師の善春にこの像の制作を依頼した。非常に写実的なこの像は、叡尊が熱心で、非常に誠実な教師であったことを示している。

叡尊の人生にまつわる数多くの逸話が残っているが、その中でも、恵まれな人々に対する寛大な思いやりの心は、大茶盛式（茶会）の起源に反映されている。1239 年の正月、西大寺の鎮守八幡神社で神に対する祈祷を終え、お茶を奉納した後、叡尊は余ったお茶を地域の人々に振る舞った。この時代は、お茶は高価な薬と考えられており、多くの人々にとって手の届かないものであった。そして、叡尊のこの行いは、多くの人々が一緒に「お茶会」を楽しむことができた最初の例であったと考えられている。たくさんの方が参拝されたので、小さな茶碗ではまかないきれなくなり、巨大な茶碗を用いるようになった。ここから、老若男女が集い、直径 30 センチメートル以上、約 7kg の重さのある、非常に大きな茶碗から抹茶を飲むという伝統が生まれた。「茶」はお茶のことだが、大茶盛という言葉は「酒盛り」とかけており、仏教で禁じられている酒のかわりに皆でお茶を楽しむということを意味している。始まりから 750 年以上たった今も、大茶盛は西大寺の人気の行事として受け継がれている。寺と地元の人々との結びつきを強めるとともに、参拝客の絆を強めている。